

【ものづくり 人づくり 地域づくり】

【至急の連絡】



秋川牧園

秋川牧園（山口県）の原料鶏肉の飼料のトウモロコシに遺伝子組み換えトウモロコシの意図せぬ混入があったことについての報告と対応

1. 「やきとりセット」や「からあげ」など鶏の加工品を頂いている秋川牧園（山口県）の鶏のエサ（飼料）に遺伝子組み換えトウモロコシの意図せぬ混入があったことが判明し、至急の報告がありました。
2. 秋川牧園の配合飼料を作っている飼料工場に納入されたトウモロコシのサンプルの抜き取り検査（トウモロコシの遺伝子検査）によってに混入が判明。調査の結果アメリカからの船から陸揚げされた港での穀物倉庫のサイロのオペレーションミスにより混入があったことがわかり、飼料生産・出荷がストップとなりました。
3. この遺伝子組み換えトウモロコシの混入は飼料工場に入ったトウモロコシ 1400トンのうち 55トンで約 3.9% の混入率でした。このトウモロコシを原料にした配合飼料が 1月5日から出荷されて、秋川牧園の17農場で使用され、1月8日に判明後、各農場のサイロの全面入替が完了するのは 1月16日とのことで、最大 12 日間この混入飼料で鶏が育てられたこととなります。16日以降は元にもどるとの連絡です。
4. 配合飼料中のトウモロコシの割合は22～32%（前期用・中期用・後期用）であることから、この期間の飼料に1%前後の遺伝子組み換えトウモロコシが混入したと思われる。
5. 農場のサイロの中の飼料の全面入替作業が順次行われ、16日以降は完全な非遺伝子組み換えの飼料となります。鶏の育成期間は約 60 日（一般のブロイラーは 40～50 日で出荷）で、今回の GMトウモロコシ1%前後混入飼料を最大12日食べた鶏がこれから出荷され、秋川牧園の製品原料として使われることとなります。



（常総生協としては・・・中面ページ）



アメリカ産のトウモロコシは巨大なタンカーに載せられて太平洋を渡ってくる。その量は年間1600万トンにおよぶ。その8割が遺伝子組み換え。その船は飼料コンビナートの港に接岸され、隣接するサイロに入る。今回の混入はこの穀物倉庫のサイロ間でおきた。



常総生協としましては

1. 今回の穀物倉庫会社でのミスによる「意図せぬ混入」の範囲内であったこと、混入率が配合飼料中1%前後であること、および早期発見でごく一時期の混入であることから、秋川牧園の製品は引き続き提供することといたします。

食品衛生法・JAS 法では、現実の生産流通過程では混入の可能性があり、5%以下であれば「意図せぬ混入」として「遺伝子組み換えでない」と表示できることとなっています。しかし「飼料」については規定がなく食品に準じて考えます。

2. 秋川牧園ではエサに地域の飼料米（玄米）を22%という高い割合で使い、トウモロコシ、大豆（きな粉）、なたね、アルファルファは nonGM（非遺伝子組み換え）・ポストハーベストフリー指定で分別管理での調達を行い、開放鶏舎、抗生物質不使用などの特徴があります。一般市場の鶏原料の加工食品の多くは飼料「不分別」（約9割が遺伝子組み換え）で、密飼い短期育成、薬剤使用という状況の中では秋川牧園の製品はたいへん優秀です。



3. 今回の状況は、飼料の遺伝子組み換えの「分別流通管理」（IP ハンドリング）が機能していること、さらに穀物輸入会社によって各段階で自主的なサンプリングチェック（穀物遺伝子検査）がなされていること、また秋川牧園さんも直ちに連絡、情報の全面開示をしてくれたことで極めて最小限の混入で済んだことを評価いたします。

但し、今回の判明は輸入陸揚げされた穀物サイロから飼料工場に入った時のサンプリング検査での判明で、港の穀物倉庫サイロからの「出荷時点」でのサンプリング検査をしていれば飼料配合前、または農場で使われる前にストップがかけられたと思います。

4. 今後の秋川牧園製品につきましてはこの時期の鶏肉が原料に使用されることとなりますが、注文の際はこの点をご留意の上判断して頂きますようお願いいたします。
5. 種子と農薬のグローバル企業が遺伝子組み換え作物を開発したばかりに、安全な原料を確保・提供するためには商社も加工生産者も（消費者も）莫大なコストをかけて生産流通過程での「分別管理」をしなければならないのは極めて不当です。

アメリカは、日米通商協議ならびに TPP 交渉において、日本の遺伝子組み換えの分別管理（IP ハンドリング）及び食品表示を義務づけた食品衛生法ならびに JAS 法を、「科学的根拠のない非関税障壁だ」として執拗に撤廃を要求しています。今後の行方も予断を許しません。

日本の畜産の飼料がほとんど外国からの輸入に頼っていること、秋川牧園ではすでに2割以上の地域飼料米を使って自給飼料の努力をしていること、私たちも同様の理解とそれに応えて生産を支え、さらなる飼料の自給努力を共にすすめる事が必要だと思います。

Q. 日本にはトウモロコシはどれくらい輸入されているの？

A. 2009年の統計では、日本の穀物輸入量2,800万トンの内、トウモロコシは約6割1,600万トンに及び、その65%が「飼料用」に、20%がコーンスターチに、残り15%が食用に使われています。

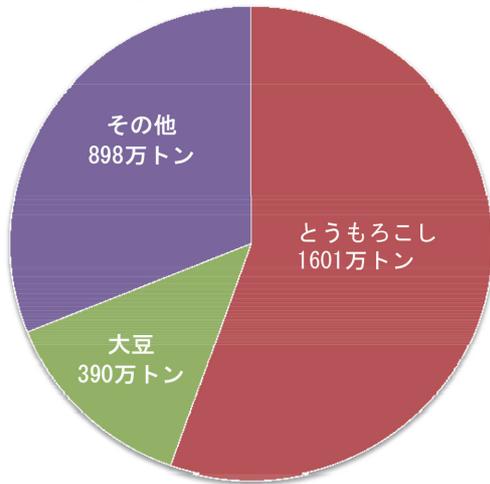
主にアメリカからの輸入に依存していて、アメリカでのトウモロコシ生産のうち約8割が遺伝子組み換えと言われています。

太平洋を渡ってきます。



この大型タンカーの中には1万トン前後ずつ仕切られていて、non-GM（非遺伝子組み換え）の穀物を運ぶ際は、遺伝子組み換えのものと仕切りで管理されています。

穀物輸入品目の内訳
(穀物輸入量 2889万トン)



出典: 港湾統計年報(2009)

Q. どのようにして運ばれてくるの？

A. アメリカからは主に下記のような段階で日本に入ってきます。

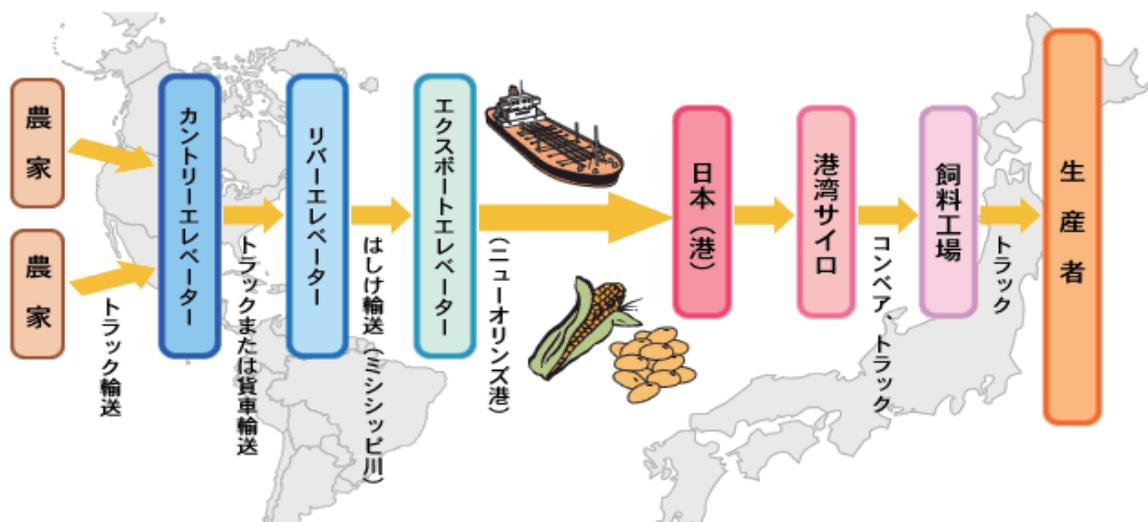
5~6万トンの大型穀物タンカー（パナマックス船：パナマ運河を渡れる船）で

Q. 「分別管理」(IPハンドリング)って何？

A. 日本では2001年の食品衛生法改正・JAS法改正で遺伝子組み換えの表示義務と同時に、「遺伝子組み換えでない」と表示するためには、分別生産流通管理（IPハンドリング）の証明が必要となりました。

分別管理は、下記の流れの各段階・・・生産（農場）、流通（トラック、サイロ、コンテナ船等）、加工（食品加工業者等）で、非遺伝子組換え農作物に遺伝子組換え農作物が混入しないよう管理し、管理されていることが「書類等」によって証明されなければなりません。

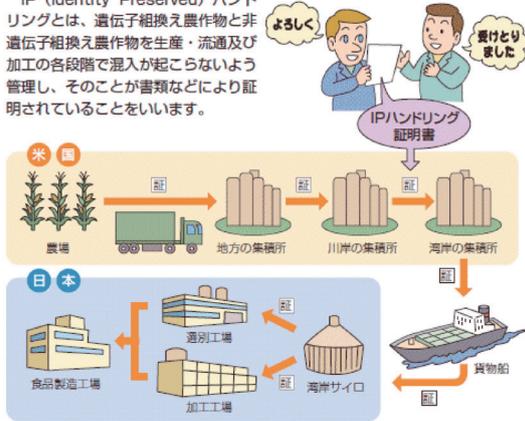
但し、現実の流通段階での意図せぬ混入の可能性があることから大豆とトウモロコ



シでは、遺伝子組換え農作物の混入率は5%以下とされました。飼料については規定がないことから、食品に準じて考えられています。

IPハンドリング(分別生産流通管理)とは?

IP (Identity Preserved) ハンドリングとは、遺伝子組換え農作物と非遺伝子組換え農作物を生産・流通及び加工の各段階で混入が起こらないよう管理し、そのことが書類などにより証明されていることをいいます。

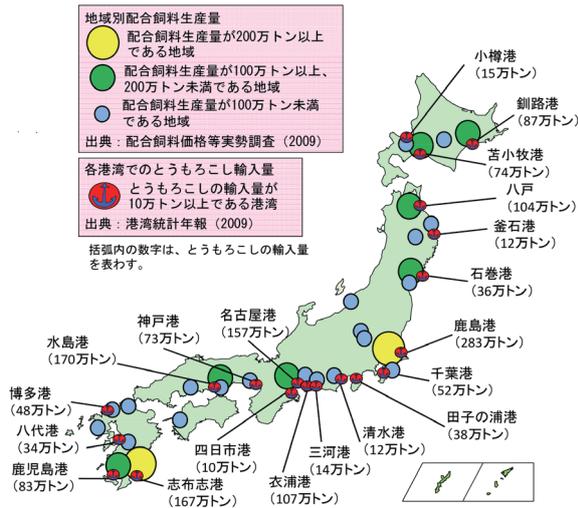


厚生労働省 HP より

Q. 穀物タンカーは日本のどの港に入るの?

A. 国土交通省・港湾局の資料では下記のような港湾(赤丸)に入ってきます。その港湾に隣接するサイロに一時保管され、その周囲に飼料配合工場が配置されて配合飼料の生産量が黄丸・緑丸・青丸の大きさで示されています。

港湾におけるとうもろこし輸入量と地域別の配合飼料生産量



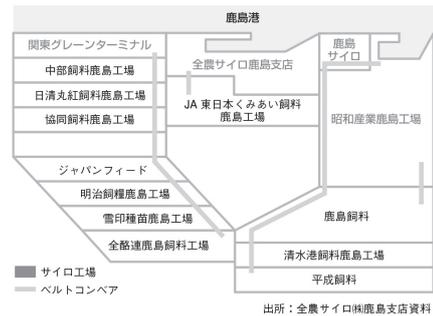
今回の秋川牧園向けのトウモロコシの陸揚げ港ではありませんが、茨城県の鹿島港が輸入陸揚量、配合飼料生産量ともに日本一です。



上の写真は鹿島港での穀物の陸揚げの様子の写真です。左に接岸しているのが大型穀物バルク船で、右が穀物サイロです。たくさんサイロが立っています。

今回の混入は、非遺伝子組み換え用のサイロ間のローテーションの際に、間違えて違う番号の組み換えのトウモロコシの入ったサイロから移してしまったミスがありました。

茨城の鹿島港は「国際バルク戦略港湾」と言われ、その港湾を取り囲むように飼料会社も配置されています。



Q. 今回、混入が判明したのは穀物輸入商社がトウモロコシのサンプリング検査をしてわかったとされますが、どんな検査をするの?

A. トウモロコシの遺伝子 (DNA) 断片をポリメラーゼという酵素を使って DNA 鎖を大量に高速にリアルタイムPCR装置増幅させて遺伝子組み換え断片を検出する方法です (PCR 法)。

